



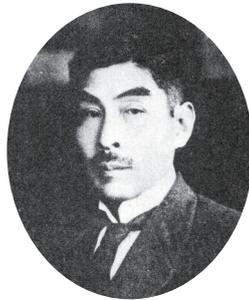
中部の

エネルギーを築いた人々



松永翁の片腕として活躍した
東邦電力初代専務 田中徳次郎

田中徳次郎は、明治9年5月、酒造業田中嘉七の次男として、愛知県弥富町で生まれた。幼少より学事に優れ、義校での成績は群を抜いていた。明治23年、上京して慶応義塾に進み、28年7月理財科を卒業した。卒業後、横浜の生糸貿易商若尾幾造



松永安左工門
(出典：『九電鉄二十六年史』)

商店に入り経験を積んだ。店則に従い前垂れ掛けの小僧姿で早朝から深夜まで働き、主人から当家の婿にと声がかかるほどであった。明治30年、試験を受けて三井銀行に入校し、2年間秘書

および調査の任に当たり、その後大阪支店に転じ、貸付係長など金融実務を積み、累進して大阪支店次長となった。このころ、慶応義塾出身で大阪で活躍していた福松商会(石炭取扱商)にいた松永安左工門や阪急電鉄の小林一三と親しく交流した。



田中徳次郎
(出典：『中京名鑑 昭和3年版』)

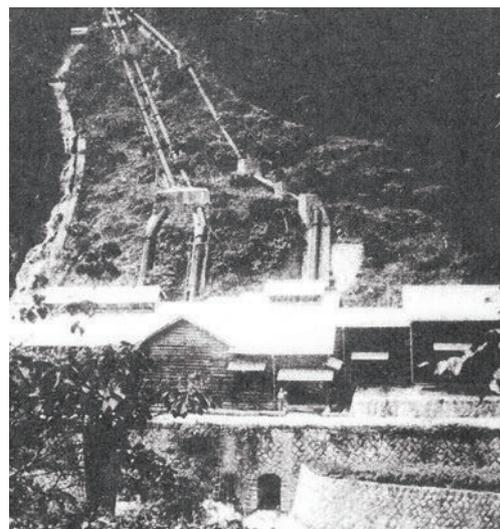
九州電気取締役支配人

明治43年、東京本部への転勤を機に三井銀行を辞し、松永安左工門、福沢桃介に誘われて九州電気取締役支配人となった。このとき田中は34歳であった。田中は「三井銀行大阪支店に居て、福博電車の創立さるゝに際し、

多少創立に手伝った関係上福沢松永両氏の幹



福博電気軌道の電車 (出典：『九州地方電気事業史』)



川上川第一発電所 (出典：『東邦電力史』)

旋によって初めて九州の地を踏んだ」と語っている。福博電車、正式には福博電気軌道は、福沢や松永が取り組んだ市内電車事業で、明治42年8月創立され、翌43年3月開催の九州沖縄八県連合勸業共進会に向けて僅か5ヶ月で工事を完成させた。時期的にも、また共進会を目指した経緯も、第10回関西府県共進会に向けて長良川発電所の建設を進めた名古屋電灯のケースと似ている。この福博電車設立の資金集めに、田中は姉が嫁していた名古屋の素封家佐分慎一郎を紹介し、佐分は後

藤安太郎(名古屋米穀取引所理事、後に理事長)を誘って出資に応じた(佐分は後に福博電車取締役、九州電灯鉄道監査役に就任する)。

一方、田中が取締役となった九州電気は、佐賀市などに供給する広滝水力電気(明治39年11月創立、福沢は大株主として参画)が事業を拡大し、川上川の水力開発に取り組む際、資金協力を求められて福沢や松永が参画して設立(明治43年9月)された会社であった。田中の九州電気入りは松永の推薦によるものだった。

九州電灯鉄道常務取締役

田中が入社したころ、北九州地方の電気界では、博多電灯(明治29年3月創立)と福博電車と九州電気との三社合併問題が浮上していた。水力地点を有し需要を求めていた九州電気と、火力発電で運営し需要が拡大していた博多電灯・福博電車とは互いに補い合う面があった。しかし、佐賀、福岡という地方感情から合併は難航したので、明治44年にまず博多電灯と福博電車が合併し、翌45年6月九州電気と合併して九州電灯鉄道が設立さ

れた。九州電灯鉄道は本社を福岡に置き、社長には佐賀の財界人伊丹弥太郎が就任してバランスをとった。常務取締役には山口恒太郎(旧博多電灯社長)、松永安左工門と並んで田中徳次郎が選ばれた。田中は、同社が合併して東邦電力となる大正11年6月までの間、松永の片腕として事業の合併統合に手腕を発揮した。糸島電灯、七山水力電気、佐世保電気、久留米電灯、長崎電気瓦斯等を合併、津屋崎電灯、宗像電灯を買収するなど、九州北西部

を中心に電気事業を統合し供給区域は福岡県西部から、佐賀県、長崎県、山口県一部にまで拡大し、九州電力界の有力会社となった。そうした田中の奮闘を「松永氏の功績と相俟って伯仲の感あり」と『九電鉄二十六年史』は記している。田中は電気事業のほか、日本電気装飾、九州鉄道、諏訪炭鉱、九州産業鉄道、技光鉄工所、唐津築港、九州化学工業など各種企業の実務取締役・監査役となり、福岡経済界で重きをなした。



九州電灯鉄道本社(出典:『九電鉄二十六年史』)

東邦電灯専務取締役

大正11年1月、九州電灯鉄道は、名古屋を中心とした広域的電気事業である関西電気(名古屋電灯後身)と合併し6月に東邦電力と改称、田中は初代の専務取締役に就任した。大正12年8月～13年5月にかけて約1年間は、欧州各国を周遊し、電気事業を中心に視察し、帰国後は早川電力常務、次いで同社が群馬電力と合併し東京電力が創設されると監査役になった。東邦電力では、昭和4年12月までの7年余専務を務め、その後昭和5年～6年の間監査役となった。資性温厚で、身を処すること謹厳、頭脳緻密で意志堅固と評された田中は、積極かつ進取主義の松永を補佐して社内固めを行い、松永が信頼を寄せるパートナーであった。特に経理の手腕には定評があり、自宅で証券会社の人と会話する姿を見て、「難しい数字がポンポン父の口から飛び出すのを聞いて感心した」(田中精一『ローアウト』)と息子の田中精一も語っている。田中は、合同電気副社長、揖斐川電気代表取締役、白山水力、天竜川電力の取締役、三河水力電気の監査役など、東邦電力系の関連事業のほか、パン販売業の銀座宝来の取締役なども務めた。しかし、昭和7年以降体調を崩し、房州方面



東邦電力本社(東京海上ビル) (出典:『東邦電力史』)



揖斐川電気 東横山発電所

で療養に務めたが、8年5月東大病院で息を引き取った。享年58歳であった。令室は名古屋証券取引所理事長を務めた高橋彦次郎の長女、長男精一は後に中部電力社長、会長となった。長唄、音楽が趣味であった。

(浅野 伸一)